

令和3年度第5回アーバンデザインセミナー実績報告書

1. 開催日時

令和3年10月29日（金） 18時30分～20時00分

参加人数: UDCBK での視聴: 1名、オンライン: 9名 = 計10名

※オンライン会議システムとUDCBKのオープンスペースでの視聴を併用

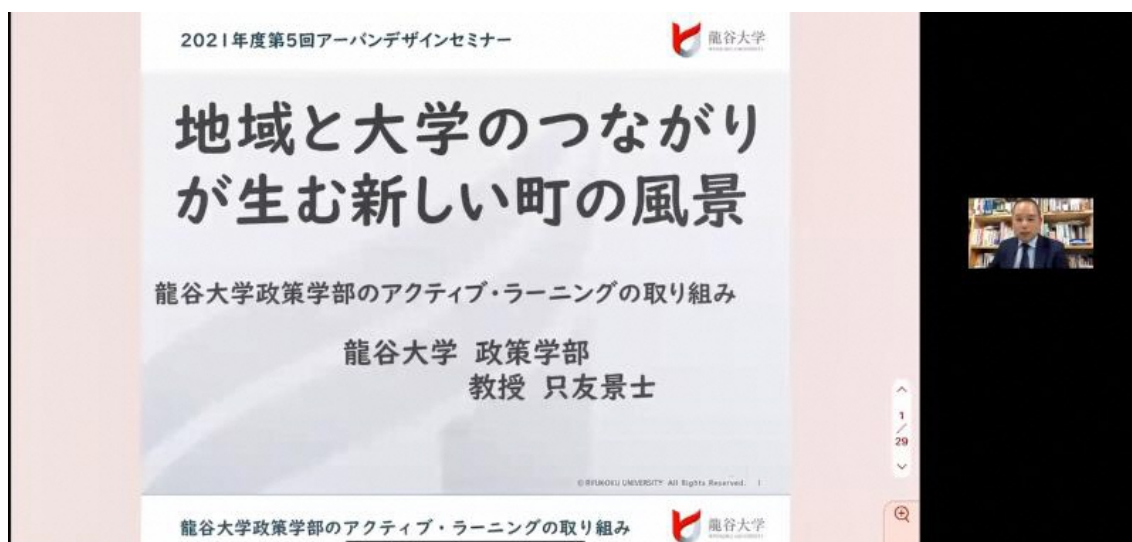
2. テーマ

「地域と大学とのつながりが生む新しいまちの風景」

- 草津市では、教育機関と連携して、「知」を活かした地域活性化を図っているところであるが、まちの価値を創造するには、地域と大学がそれぞれの知見を持ち寄り、対話することが重要となる。そこで、今回のセミナーでは、市民・地域社会と大学が連携しながら作成した「まちあるきマップ」などの事例を参考に、まちの魅力を高めていくための地域と大学とのつながりの在り方について考えていく。

3. 話題提供者

- 只友 景士 氏
龍谷大学 政策学部 教授



4. 話題の概要

(1) 只友氏による講演

ア. 龍谷大学政策学部のアクティブラーニングの取組

(ア) アクティブラーニング科目

- 初級地域公共政策士資格教育プログラム科目として、政策実践・探究演習、コミュニケーション・ワークショップ演習（履修指導科目）、キャリアデザインのための企業研究など5つの科目がある。
- 「初級地域公共政策士」という資格は、公共政策系の学部・大学院を持つ8大学が連携した京都発、日本初の学部段階で取得可能な職能資格である。
- 初級地域公共政策士資格教育プログラム以外の科目では、他学部や大学コンソーシアム京都が提供する科目のほかに、演習としてゼミ単位で行うものがある。

(イ) アクティブラーニング要素を含んだ正課外の学びの場

- 「Ryu-SEI GAP」という課外活動の地域課題解決プログラムがあるが、1期生の武村さんが起業されたのがベビーフード販売と有機野菜農家支援の事業を行う「株式会社はたけのみかた」（湖南市）である。
- 「Ryu-SEI GAP TERM」では、龍谷大学の附属校である平安高校の推薦生に向けた入学前の教育を1月から3月にかけて行っている。
- ほかに学内の「カフェ樹林」という共同作業所を拠点にした学生サークル「チーム・ノーマリゼーション」の活動のなかから靴磨き・靴修理を行う「株式会社革靴をはいた猫」につながっていった。

(ウ) アクティブラーニングを通じた社会連携活動

- 学部の教育科目レベルでも、2017年から実施している京都すばる高校との連携を行っている。また、大学で開発したアクティブラーニング手法を大津市教育委員会が主催している大津人実践講座への講師派遣と監修などの形で地域連携・地域還元を進めている。
- 社会連携・社会貢献型の教育活動の実践としては、主に三つあり、一つ目が「只友景士ゼミナール」であり、まちあるきの企画・実施などを行っている。二つ目は、政策「実践・探求演習」として、福知山市と守山市のプロジェクトを担当している。ここでは、市民の話し合いによるまちづくりのプロジェクトに取り組んでいる。三つ目は、「大津人実践講座（大津市生涯学習講座）」であり、市民にまちづくりへの入り口を見つけてもらう活動をしている。
- 一例として、「深草・稲荷まちあるきマップ」は社会連携・社会貢献型の教育活動の成果の一つである。もともとは、2019年10月に京阪電車の最寄りの駅名が「龍谷

大学前深草駅」に変更されるのを機に大学としても深草の情報発信に取り組みたいということがきっかけであった。そこで、株式会社 Storly が開発した地図情報のシステムを活用して、産学でコラボレーションしながら大学周辺の地域情報をデジタル化した。

- その後、伏見区や京阪から、この地図を使って、まちあるきに活用したいという申し出をもらった。その後も両者とは、冊子を作ったり、沿線の活性化について話し合ったりと様々なかたちで連携が継続している。
- 大津人実践講座は、大津市の在住・在勤者向けの講座であるが、ゼミ生も参加している。まずは、地域のまちあるきから始め、まちの課題を発見し、まちの未来について考えるということを行っている。
- ほかに今は、コロナ禍の影響で行えていないが、小学校で土曜日にとりの巣箱づくりから自然について学ぶアクティブラーニングの活動も実践している。

(エ)「政策実践・探求演習」

- この科目では、実際の地域の課題に対して、受講生が自ら課題を分析し、連携先との協働によって解決策を企画、実施することを通じ論理的思考力や表現力、マネジメント能力などを身につけることを目的としている。
- 先述の初級地域公共政策士資格教育プログラム科目の一つであるが、最大の受講者数であり、毎年 100 名ほどが受講している。このうちの一つのプロジェクトが後述の「人とまちが育つ「話し合い」創造プロジェクト」(市民討議会)である。
- 教育プログラムの構成として、1年を通じて行い、プロジェクト活動のほか、前期・後期での学習レポートと報告会がある。また、評価観点ごとに到達基準を明示したルーブリックというものをを用いて学びの振り返りも行っている。

イ. 人とまちが育つ「話し合い」創造プロジェクト (市民討議会)

- 「話し合いがまちを変える! 話し合いがまちを創る! まちの未来を開く話し合いを創る!」をキャッチフレーズに、話し合いからまちを変える、話し合いからまちづくりを仕掛ける「まちづくり仕掛け人」を育てることを目的にしている。
- 話し合いによる市民討議会とは、ドイツ発祥の「プラーヌングスツェレ(計画細胞)」と呼ばれる市民討議の方式が日本に導入されたものである。
- 龍谷大学では、福知山市や守山市の事業に参画しているが、福知山市実施の「未来を描く! 福知山 100 人ミーティング」や「次世代交流ワークショップ」、守山市実施の「守山市市民懇談会」は、全国各地に広がる市民討議会の一つと考えられる。
- 全国で 300 ほどの市民討議会が実施されているが、基礎自治体の数がおよそ 1,700 であることを考慮すると、結構な数にのぼっている。
- 市民討議会の定義として、「1. 参加者の無作為抽出」、「2. 謝礼を支払う」、「3. 少人

数でのグループ討議」、「4. まとめの発表と全員で投票」、「5. 討議前に必要な情報を提供」というものがある。福知山市と守山市では、謝礼を支払っていないので、厳密には市民討議会とは言えないが、類似のことを行っている。

- 市民討議会の意義として、市民参加と協働のまちづくりの原動力になるということが挙げられる。話し合いの結果を市民にお返しし、実感してもらうということを実践している。
- 市民の話し合いが、新しい地方自治の在り方を市民自身が考えていく時のヒントにもなる。よって、自治体は、そのような動きを支えていく必要がある。
- 地方自治体の二元代表制や議会制民主主義を補完する仕組みとして機能することが期待される。
- 「消費者化する市民」問題。地方自治に熱心に参加する市民がいる一方で、無関心な市民も存在する。市民の側に、誰かが何かしてくれるのを待っているような姿勢が見受けられる。
- 一休さんの「屏風の虎」のように、ただ待っていればまちづくりの担い手が勝手に出てくるというわけではない。

(ア) 守山市の守山市市民懇談会

- 従来の市民参画方法として、審議会や懇話会、パブリックコメント、アンケートなどがあるが、話し合いによる熟議と幅広い市民参加を兼ねた方法は空白地帯であった。この空白の領域を埋めるものが、「市民懇談会」であると言える。
- 守山市の市民懇談会は、市民参加と協働の手法として条例で定め、行政手続きとして初めて実施された。守山市では、男女共同参画社会づくり推進会議において、男女共同参画条例策定に向けた議論の過程で、2014年8月に市民懇談会が開催された。

(イ) 未来を描く! 福知山100人ミーティング

- 福知山市では、市がすすめる「市民協働の推進」や「政策マーケティング事業」の一環として、2013年9月に開催された。

(ウ) そのほかのプロジェクト

- 洲本市、京丹後市、亀岡市で個別プロジェクトを行っているほか、丹波市黒井地区では大学の同窓会の協力のもと地域での人材育成などの交流事業なども実施した。
- 学生に対しては、単に実施して楽しかったということで終わるのではなく、なぜ、こういったプロジェクトに自治体がお金を出してくれるのかということを考えるようにと言っている。教育プログラムの中で、地域に対する責任を果たすことが大切である。
- プロジェクトを通して、地域との交流も進み、守山市や福知山市に就職する学生も出

てきた。地域に入り、人的な繋がりができた経験などから、地域で生きていく自信が生まれ、地域での就職や起業といった事例も生まれている。

ウ. 市民協働による政策開発プログラム

(ア) 行政サービスの協働化と市場化

- 行政サービスの方向性としては、市民との協働に向かうか、あるいは委託や請負といった市場に移行するかという選択がある。また、都市経営という観点から合理化・効率化を図ることも考えられる。
- 市民懇談会などで目指しているものは、協働化を進めながら、合理化・効率化を図り、住み続けたいくなるまちとなるように、行政サービス水準を上げることである。

(イ) 地域課題の発見とその解決へのプロセス

- 市民セクターと行政・公共セクターがあるが、様々な課題が増え続ける中、地域社会が必要とするサービス全てを行政が担うというのは不可能になっている。
- 今後は、市民討議会などの熟議民主主義を通じて、市民性の涵養と解決能力の養成（エンパワメント）による地域課題の発見とその解決へのプロセスをつくり出していかなければならない。
- そのためには、地域における社会・経済のオープン・イノベーションなどが大切になり、知識・技術の生産を担う大学の役割も重要になってくる。

5. 質疑応答

(1) Q: 「まちあるきマップ」は大変に興味深かった。行政としてもコラボレーションしていきたい。今後、マップの中に地域の構造変化などの情報（例えば関係人口など）が入ってくるとより意義が高まると思う。

A: マップには、観光以外の情報も入っており、例えば学生が調べた歴史に関連する記事（伏見人形や朝鮮通信使が通った街道など）もある。これにより、地域の人がもう一度、地域を見直してもらいきっかけづくりをしている。その次のステップとして、現在の地図を基盤にしながら地形や防災、関係人口についての情報なども加味して、地域学といった段階まで進めていきたいと思う。そうすることで、将来の政策にも繋がっていくと考える。

(2) Q: 何かトピック的な学生や市民の感想あるいは声などがあれば教えてほしい。

A: 例えば、行政職員の方からは、大学が何か新しいことをしようとしているのなら自分達もイノベティブにならなければいけないという声をもらった。また、地域の高齢者との交流で体操の事業を行っていたとき、これからも続けてほしいという声があった。何か孫が来てくれたような、そういった親しみを持ってもらったのだ

と思う。ほかにも、最初は学生が外から来て何かをやっているので迷惑だと思われていた地域が少しずつ変わっていき、学生と一緒に地域の行事を行い、最後には地域で自主的に行事を行うようになったこともあった。補助金の事業だと補助金の期間が終わるとそれまでだが、大学が入っていく事業は地域そのものが穏やかに変わっていく感じである。

(3) Q: 現在、市民活動として今日紹介されたようなデジタルマップを使って地域の「お宝」を紹介する事業を始めている。今後ファンを広げていきたいと考えているが何かアドバイスをもらえれば嬉しい。また、スポンサーを獲得して事業を続けたいと思っているので、その点もアドバイスがあれば有り難い。

A: 例えば、今参加している小学生が大きくなって中学生になったら何かボランティアで手伝ってもらえるようにするなどの仕組みづくりが一つある。そういったリーダーを育てることを通じて、自立する人が地域に出てきたら、それはとても素晴らしいことだと思う。さらに、地域の人から何か得意なものを貸していただきというかたちで、協力してもらえる人を増やしていくということもある。また、スポンサーの件について、深草の事例では、マップによって京阪として沿線の価値を高められ、自分たちにも利益が回ってくるということがあり、CSRの一環だと感じてもらっている。また、協賛というかたちのほかにも企業の活動をPRしてもらおう場として使ってもらっても良いと考える。その中で企業の持っているものやノウハウを提供してもらえる。色々な能力などを皆で社会の中でシェアしたらファンや仲間が増えて、何か良い世界をつくっていけるように思う。

(4) Q: 現場に行った学生の発展的なエピソードがあれば教えてほしい。

A: 関わった地域に就職するという事例がまずある。そのほかには、洲本市のプロジェクトでは、関わったOB・OGのグループが地域のお米を大学で販売している。地域に愛着を持った結果、そういった継続的な地元支援に活動が繋がっている。プロジェクトで地域との関係性が強くなったことで色々な成果が生まれてくる。

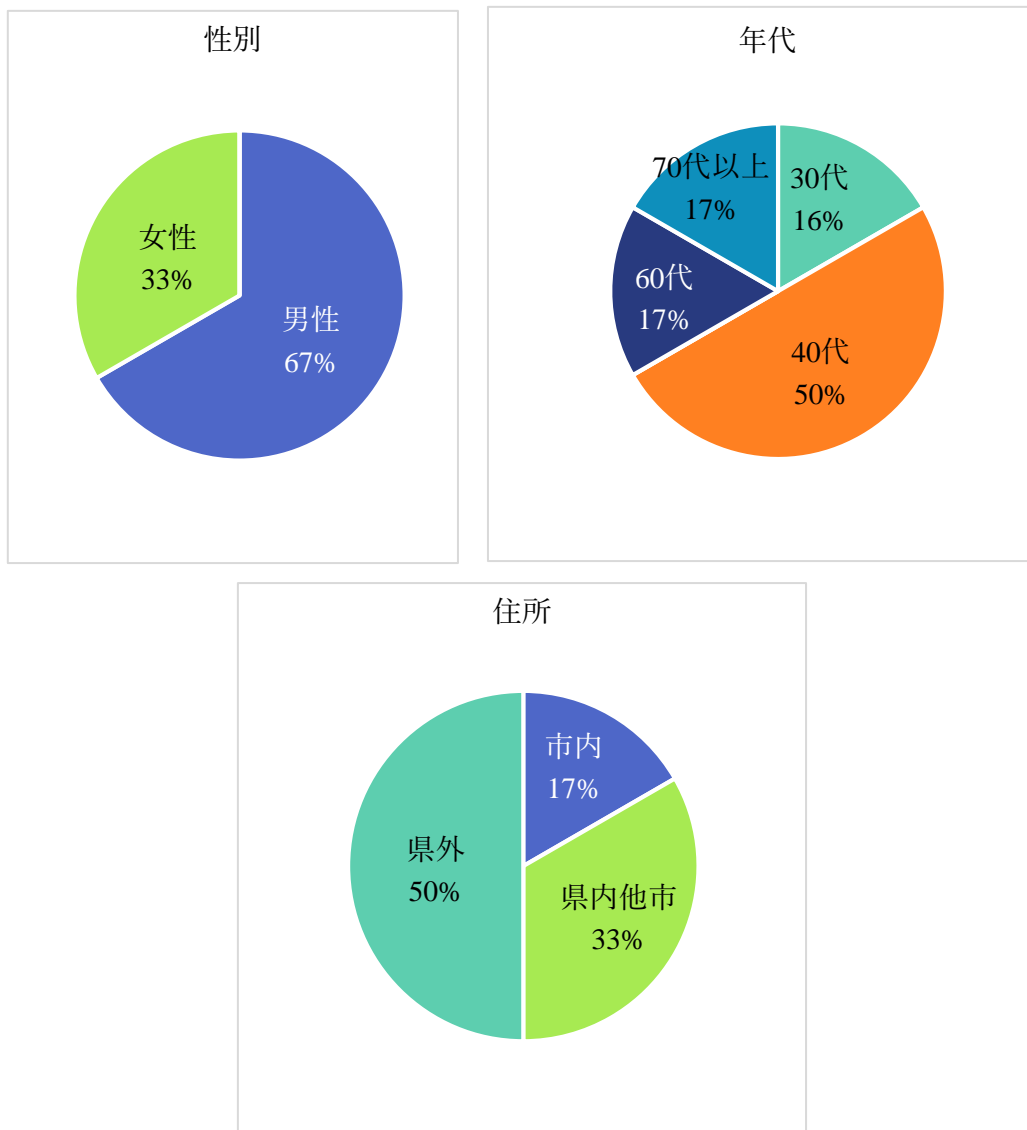
6. まとめ

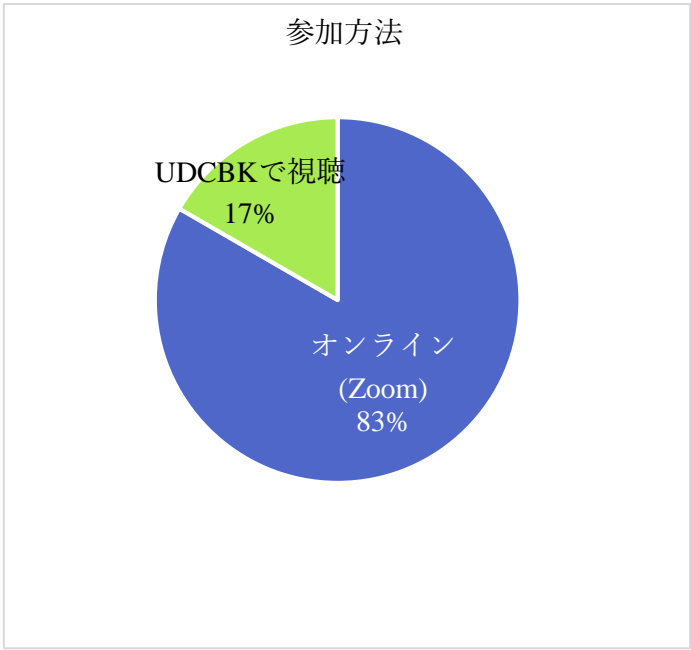
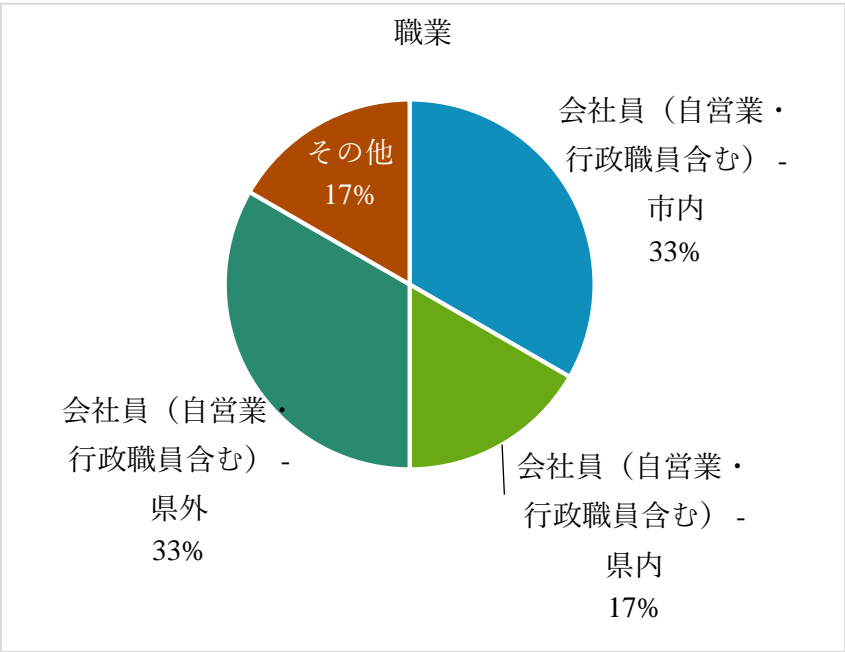
- アクティブラーニングが大学の授業に取り入れられていく中、大学が地域との関わりを持ちながら、地域の課題に向き合うプロジェクトが進行している。
- プロジェクトにおいて学生が地域に入っていくことで、地域も自主的に少しずつ変わっていく。また、学生と地域との関係性が芽生え、就職や起業など新しい動きが地域で生まれてくる。
- 産学公民が連携するためのプラットフォームであるUDCBKでは、大学と地域を繋げる活動を今後も推進していきたい。

7. アンケートまとめ

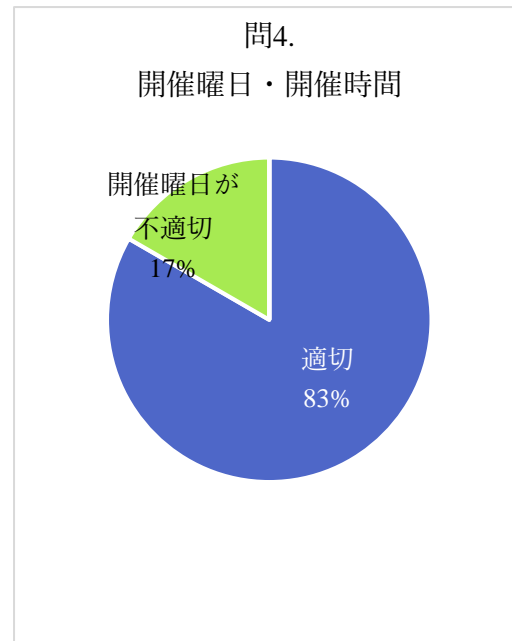
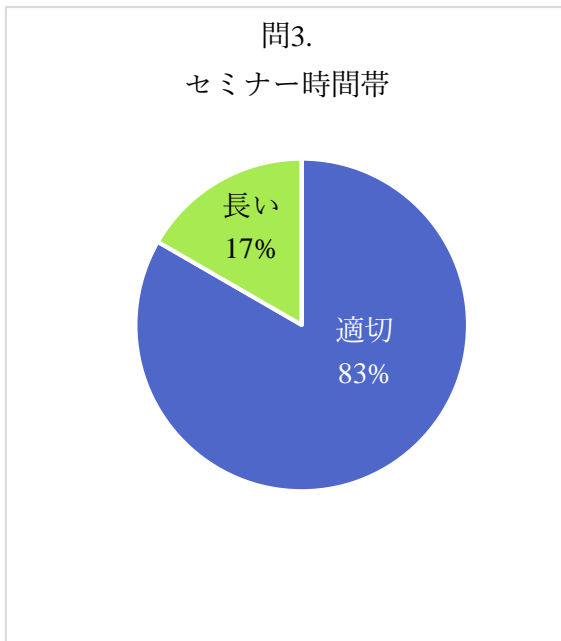
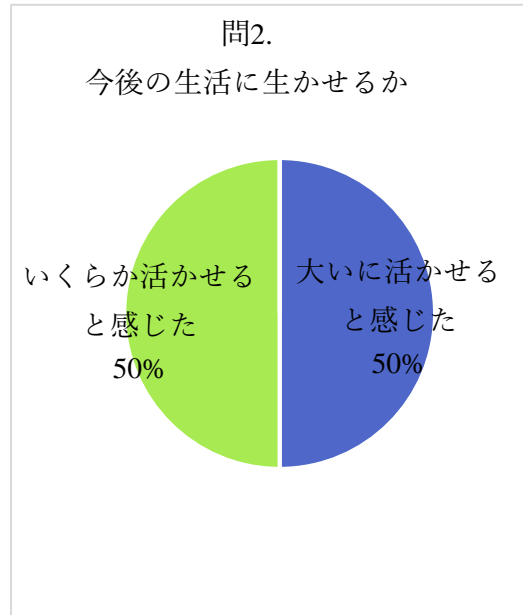
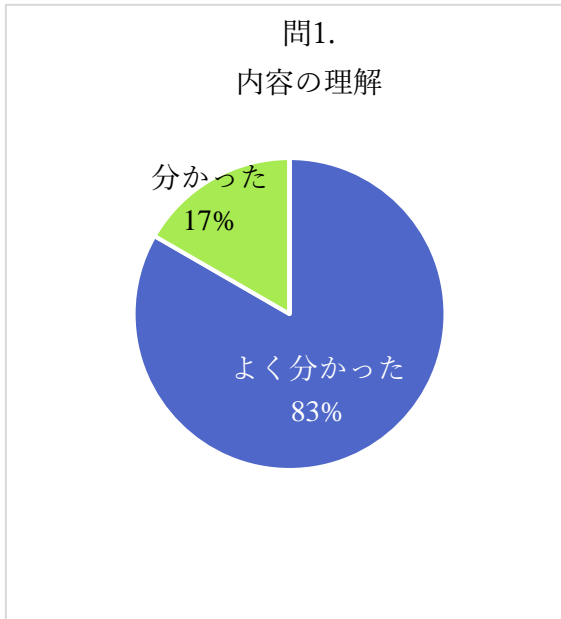
(1) 参加者属性

参加者 10 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 6 名、回答率は 60%だった。





(2) 内容について



[自由記入欄回答]

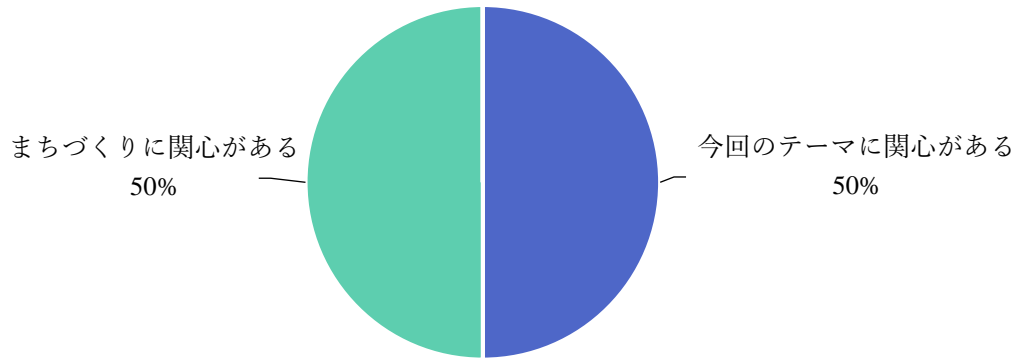
問3. 時間はどうでしたか。

- 長い→本題 50分 質疑 10分くらい

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

- 開催曜日が不適切→会社員だと土日か月～木の夜が良いのでは。

問5.
参加動機



【自由記入欄回答】

問6. それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- エコハウス <https://tabi-labo.com/282779/lifehaus> (40代男性)
- 人・モノ・コトとつながれる、駅前マルシェのような場 近郊農業 (40代女性)
- 学生と市民公益活動の連携 (40代男性)
- 郊外住宅地の高齢化、空き家問題。

私は今は県外在住ですが、実家が草津市若草にあります。いわゆる古民家再生や地方移住の促進は、いろいろ問題はあるもののその議論も含めかなりメジャーになってきて久しいですが、70年代頃に開発された郊外住宅地については、あと20年位は「もちそう」で差し迫っていない問題だからか、あまり活発に議論されていない気がします。しかし世帯主の高齢化が進み、私たち2代目の世代はどんどん他地域に出ていき、児童公園も寂れています。今後どのような取り組みができるか探っています。
(30代女性)

【自由記入欄回答】

問7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 街の歴史的な背景から Map を描き起こすところ。Airbnb の体験型であれば、オリジナリティ溢れる企画が豊富で、個人として収入も得られることから趣味を実益に変えることができると思う。まちおこしの場合、企画者が離れたとしても持続しないと

意味がないので、定着するようなものが求められると思う。(40代男性)

- 地域の人に応援してもらうような活動の在り方が分かりました。関わった学生が定着(就職)するというのが、大きな成果だと思いました。(40代女性)
- ドイツの市民参加手法は、前回の草津市の総合計画策定でも取り組まれており、草津市のことも踏まえた説明があれば良かったと思います。市民公益活動側は、担い手不足や高齢化があり、学生は、就職に役立つ社会貢献を探しているので、そういうマッチングができればと思います。(40代男性)
- 大学での具体的な実践についてお聞きできてよかったです。地域性や、大学の生徒の性格(専門学科による特性など)を考慮すれば、各地域、学校でさまざまな関わりができそうだと思います。まちづくりに関わる人間を繋いでいくために、子どもたちを「巻き込んで」いくことの意義に強く共感いたしました。(30代女性)
- 会場の参加者ですが、多様なアクティブラーニングや素晴らしい活動に感心しました。地域に入り、地域と交わる学生のみなさんや御一緒に活動する市民の方々の満足度もかなり高いと思いますが、何かトピックス的な学生や市民の感想や声などがあれば御紹介いただくとありがたいです。(60代男性)